

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education



巻頭言

総合科学研究所長

竹尾 利夫

TAKEO Toshio

日本において大学の大衆化が一層進む中、大学教育のあり方が改めて問われています。各大学では教育の質を確保するため教育課程を中心に授業の形態、教育方法あるいは学習成果の評価など、さまざまな改革が実施されています。本学の総合科学研究所が中心となって推進している機関研究「大学における効果的な授業法」やプロジェクト研究も、質的に多様化した学生たちに対応するための授業法の開発と研究に他なりません。また、本研究所と連携した中学校・高等学校の「学力向上に関する研究」も、研究授業の公開や研究会を重ねることで、より大きな成果をあげています。本学は中・高・大の一貫教育の中で着実に教育力をつけてきました。

ところで、現代の大学には教育・研究のほかに、生涯学習社会の構築に向けた、いわゆる開かれた大学としての機能が求められています。文部科学省が「わが国の文教施策」（平成10年）として掲げる「大学等の高等教育機関は、高度で体系的かつ継続的な学習機会の提供者として、生涯学習社会の中で重要な役割を果たすことが期待され、広く社会に開かれることが求められる」とする機能です。既に本学では、学部・学科単位で公開講座を開催するなど、積極的に開かれた大学づくりに取り組んできました。さらに本研究所の主催する「開かれた地域貢献事業」では、ここ数年、名古屋市瑞穂児童館、保健所との共催で多くの講座を開催して大学開放や生涯学習の活性化に努めています。本誌には、そうした地域貢献事業を学内外の皆様にご覧いただきたく、活動内容を掲載しました。

生涯学習社会の構築を目指すこれからの日本において、大学の果たす役割は重要です。学習内容ひとつを考えてみても、技術の向上、知識の習得を目的とするものから、心の豊かさや生きがいを求める学習など幅広いものがあるからです。本研究所では、今後も地域の人々の学習ニーズに応えるべく講座内容を検討し、大学の教育研究の成果が事業に反映できるよう努力をしていく所存です。皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成22年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂児童館 交流事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館 館長 長谷川榮子

平成20年度のオープン記念イベントにご協力いただいてから早や4年目を迎えました。年々新たな企画もあり、名古屋女子大学との「開かれた地域貢献事業」の交流事業は充実した内容になってきました。平成22年9月から平成23年2月にかけては、ほぼ月1回のペースで以下の7つの講座を実施しました。

「音とコンピュータのあそび」、「乳幼児の食育相談」、「豚肉カレーと野菜を使ったおやつ」、「おねえさんといっしょにあそぼう」、「英語で歌ってロックンロールタイム」、「子育てグループ教室—親子遊びと保護者の交流」、「ひなまつりの伝統菓子『おこしもの作り』」を実施しました。なかでも「おこしもの作り」は粘土遊びに似ているので楽しそうに型にはめこんだりクッキーの型で形をぬいたりしました。蒸しあがると「おー」と歓声があがっていました。参加した子どもたちは笑顔いっぱいでした。「かざっておきたい」、「また作りたい」、「早く食べたい」等で皆がそれぞれ喜んでいました。どの講座も楽しめました。

もう1つの事業は、「クリスマスを皆でたのしもう」です。「オーナメントクッキーをつくろう」はすぐに申込者でいっぱいになります。イルミネーション、「お話タペストリー・ペーパーサート・ハンドベルなどを楽しみましょう」、「おねえさんとあそぼう」、「ひのきを使って遊べるクリスマスの飾りをつくろう」、「おまつり気分遊ぼう・『てんかい図』をつくろう」を行いました。「イルミネーションが年々素敵ですね」と多くの利用者から声が出ていました。「ど

のコーナーも年々工夫されて内容がいいですね」、「盛りだくさんで楽しかった」、「考えながら遊べるコーナーや工作ができて楽しかった」、「もっと遊びたかった」など多くの声も届きました。

また、今回はじめて名古屋女子大学高等学校の341名の生徒が家庭科の授業で来館されました。以後時々遊びに来て来てくれています。この様な高校生とのつながりを大切にしています。大学との交流を深めることで遊びの体験が広がりました。「生きる力を育むため」には、子ども時代の遊びの中に大きな鍵があると言われていています。当館では、積極的に「遊び」を発信しています。遊びの持つパワーが年齢を問わずひきつけるものであって欲しいと思います。子育ては、乳幼児期のみでなく子どもが大人になるまで続くものです。地域における子どもたちのための拠点施設として幅広い年代の子どもたちの育ちと子育てを連続して見守っていきたくと思います。



ひなまつりの伝統菓子作り



クリスマスイベント

平成22年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂保健所 「若がえり教室 キラキラコース」を終えて

名古屋市瑞穂保健所 保健師 松田圭子

今回が2回目となる認知症・うつ予防教室「若がえり教室 キラキラコース」は、平成22年9月～23年1月の期間に6回コースとして開催をしていただきました。70歳代を中心に、男性6名・女性27名が参加し楽しくワクワクする教室を体験しました。名古屋女子大学ならではの様々な企画内容の教室として参加者からは大変好評をいただいています。

「オリジナルTシャツ作り」や「カラーコーディネート」では、今までに体験をしたことがないことが体験できたという声が沢山出されました。また、「英語でポップスを」では、学生時代には苦手意識があったものでも年齢を重ねたことで違った気持ちで体験することができたと笑顔で話される方がいらっしゃいました。「薬膳料理の実習」では、男性の慣れないエプロン・三角巾姿も可愛く女性以上に積極的に取り組んでいらっしゃいました。試食では、会話もいつも以上に弾みました。「櫓を使った作業」では、各人が様々な工夫をして出来上がった作品に対しての熱い思いを語られ、現在も自宅大切に使用しているというお話を伺っています。どのプログラムでも、自分一人では体験できないことや苦手意識のある内容を、

参加者同士が声をかけあいながら楽しく体験させていただきました。参加者が先生方とお話する表情は、とても若々しくもあり好奇心でもいっぱいでした。時に、手伝いに入られた学生さんたちから作業の手ほどきを受けたり、会話することができたこともとても楽しい思い出になったそうです。

認知症予防の教室では、アクティブなプログラムを互いに交流をしながら楽しめることが大切だといわれています。また、新しいことにチャレンジすることでワクワクする気持ちを味わうこともとても効果があるともいわれています。名古屋女子大学という普段なかなか足を踏み入れにくい場所での開催は、参加者に快い緊張感と刺激を与えてくれます。

今回の教室では、参加をすることで色々な刺激を受け、新しいことに挑戦する機会を得ました。参加中だけではなく、教室が終了してからもチャレンジする意欲を維持している方が沢山いらっしゃいます。名古屋女子大学の先生方からご指導いただくことで、瑞穂区の高齢者がますます元気に暮らしていくことができるようになっていくことを感謝しています。



カラーコーディネート



簡単薬膳料理



ヒノキの木工作品づくり

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究5」

～多様な学習成果の評価方法の開発～

石倉瑞恵・神山久美・白井靖敏・遠山佳治(代)・羽澄直子・原田妙子・幸順子

本研究では、平成23年1～2月に全教員（非常勤講師を含む）を対象とした「学習成果の評価方法に関するアンケート調査」を実施し、現在その結果分析を進めている段階です。

そこで、今回は最近入手しました資料「DVD 授業ライブラリー」を紹介します。平成23年3月15日に「シンポジウム大学の授業を改善する」(横浜)に、本研究会より2名参加し拝聴する予定でしたが、東日本大震災直後の計画停電により、本シンポジウムは中止になりました。そこでは、神奈川工科大学教育開発センターが長年をかけて全国各大学等で収集された名講義より50授業を選択したDVDが紹介され、FDの原点である「授業改善」を再検討

するものでした。その後、同大学のご配慮で、そのDVDを本研究会に分けていただき、双方向授業・学生参加型授業などさまざまな授業形態を通して、学生と教員との信頼関係が構築されている授業を見ることができます。

授業における学習成果の評価方法を考える前に、授業が学生たちの学ぶ意欲を促進するものでなくてはなりません。今後も本研究会では、様々な資料を参考にしながら、本学における総合的な観点における学生評価のあり方を検討していきたいと考えております。

(文責：遠山 佳治)

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～女性をめぐる教育と政治の相互関係(19世紀～20世紀前半)～

石倉瑞恵・氏原陽子・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子(代)・依岡道子

当機関研究は平成17年度に始まり、平成23年度から新たに2カ年四期目の研究を進めることとなりました。メンバーは第三期と変わりませんので、本学創立者越原春子の建学の精神、教育理念および国内外の女子教育についての研究という基本目標を継承し、これまでの研究成果をふまえ、各々の専門性を活かした討議、検証に取り組んでいきます。

今期の研究テーマは「女性をめぐる教育と政治の相互関係」(19世紀～20世紀前半)です。女子教育はとかく国策などに利用され、政治的意図に振り回されることが多かったようです。しかし一方では教育を受け知見を積んだ女性たちが意識を高め、政治に関心を持

つようになり、社会改革運動や参政権獲得運動などで政治への関わりを強めていったという面もあります。政治は教育を変えますが、教育もまた政治を変える力を持っていることに女性たちは気がつき、行動を起こしたのです。

今年度はまず日本初の女性国会議員の一人であった創立者の政治的活動およびその位置づけを確認した上で、政治と女子教育がどのように影響しあってきたかについて、日本、イギリス、アメリカ、チェコといった国々の事例を見だして考察する予定です。

(文責：羽澄 直子)

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～遊びの中の学びI～

幼児保育研究グループ

今年度は、研究主題を「遊びの中の学びI」とし、3年計画の初年度として、遊びの中での「学び」がどのように芽ばえ育まれていくかを実態把握していくことを目的として取り組みを開始しています。幼児期に育てたい力は、知的好奇心などであり、それを情動的な側面と認知的側面の変化から読み取っていくためには、そこに働きかける環境の構成と教師のかかわりが大きく影響していくと考えます。4月は、期待と戸惑いが見られた子どもたちも、個々に好きな遊びを見出し、意欲的に自ら取り組む姿が見られるようになりました。特に、園庭の冒険山では、虫や土の様子に目を向け、自然の中からたくさんの発見をしています。個々の小さな虫探しから、友だちとの共有体験へと変化し、さらにその世界を広げあっていく多くのかかわりへと結びついてるよう感じられます。また、今までの遊びから勇気を出して少し挑戦してみようという積極性の現れとなる姿もあり、安全性についての環境も整備しつつ遊びの広がりを見守っているところです。3歳児が、4・5歳児の遊びを憧れの眼差しで模倣し、その姿を傍らで見守る年上らしい思いやりの姿、更なる発展が期待される毎日です。



大好きな図鑑でかくにん
——冒険山にて——

(文責：森岡 とき子)

機関研究

「中学生の学力向上に関する研究」

～主体的な学びを促す基本的指導技術の向上～

中学校学力向上研究グループ

昨年度は「主体的な学びの姿を求めて」をテーマに掲げ、1年を通じてそれぞれの教員が「主体的な学び」や「主体性」について工夫を凝らした実践を積み重ねることができました。しかし、授業が授業者と学習者との協働である以上、更に質の高い「学び」を目指すためには、授業者はもちろんのこと、学習者にも質的向上を求めていかなければなりません。そこで、生徒がより意欲的に授業に臨み、より高い学力を身につける授業を目指すためには、授業者が「自分の授業のどの部分をどう改善していけば、学習者の学びの質が高まるのか」ということを常に模索する必要があると考えました。こうした点から、本年度は更なる学力向上を図るために、授業の基本である「導入～展開～まとめ」という流れにポイントを絞り、年間を通じて中学校全体で授業の質的向上に取り組んでいきます。大きな研究活動の流れとしては以下の6つを柱に進めます。



研究会

①個人テーマに基づく授業実践、②授業実践レポートの作成と提出、③研究授業・公開授業、④研究会、⑤夏期研究合宿、⑥研究発表会全体の研究テーマのもと、個人レベルで各自の年間テーマを設定し、そのテーマに基づく授業実践を積み重ねます。(文責：福田 誠)

機関研究

「高校生の学力向上に関する研究」

～思考力を高める授業のあり方～

高等学校学力向上研究グループ

私たちは高校生の学力向上を目指し、「思考力」を育むために「生徒が主体的に取り組む」ということをキーワードとして研究活動に取り組んできました。

「思考力」を育むための授業づくりは、いかにして生徒たち一人ひとりが自分の力で考えなければならない状況をつくるかということに大きく関係します。そしてその状況をつくり出すために、私たち教員は授業を多角的に捉え、ひとつの授業の中にたくさんの「しかけ」をつくるのが大切なのではないかと考えました。いろいろな角度から生徒たちに迫り、生徒たちの中から自然に湧いてくる「考える」活動を積み重ねることにより、結果的に「思考力」を鍛えることにつながるのだと思います。そのため、本年度は「思考力を高める授業のあり方」に立ち返り、テーマに掲げることとしました。



研究授業

また、授業を多角的に捉えながら研究活動を進めるためには、各教科の特性を考慮して取り組むことが不可欠となります。そのため、まずは科目を大きく ①理系科目 ②文系科目 ③芸術・体育などの3つに分け、本年度は理系科目に特化した全教員参観型の研究授業を公開する予定です。なお、公開授業後は本校教員と大学の先生方による研究協議を行い、高校生の学力向上につなげる授業のあり方について模索していきたいと思っております。(文責：野中 知里)

プロジェクト研究

「実験を取り入れた参加型理科教育の推進に関する研究」

市原千博(代)・宇野民幸・吉川直志

理科、中でも物理学は本来、目の前に起こった不思議な出来事を解明していく面白さで成り立つ学問です。幼児や小学生はそのことにすなおな反応してくれますが、中学・高校と学年が上がるにつれ、物理は面白くない暗記科目と思われるようになり、履修率も下がってきます。

本学では家政学部で「生活の物理」(短期大学部にも開放)、文学部で「現代科学の様相」が開講されています。しかし、普通の講義形式で実験科学としての物理学本来の面白さを伝えることは容易ではありません。

今回プロジェクト研究として「実験を取り入れた参加型理科教育

の推進に関する研究」を実施する機会が得られました。上記の授業で実験を積極的に取り入れ、受講学生ができるだけ自身で不思議体験をし、そこから疑問を解決していけるような授業を作り上げていきたいと考えています。前期開講の「生活の物理」ではすでに10種類以上の実験を試してみましたが、好評だったと自画自賛しています。

教職を目指す学生には、自信を持って物理の面白さを児童・生徒に語るができるように、他の学生にも、科学的思考を身につけて今後の生活の軸となるように助力できればと願っています。

(文責：市原 千博)

プロジェクト研究

「教員養成課程における実技教科指導内容の検証（2）」

～幼児教育現場の卒業生を中心としたフィードバックによる～

本研究は平成22年度に行った研究の発展的なもので、本学卒業生の現職教員を対象に、幼稚園を中心とした実技教育の現状と、大学での授業がどのように役立っているかについて、アンケート及び聞き取り調査から検証するものです。昨年度の小学校での現状調査では、児童の技能面の差について、音楽・図画工作・体育の各教科における指導法が課題となりました。幼稚園の場合は教科別になっていないので、表現領域として、全ての分野にわたる技能面の充実が求められます。加えて、小学校でも謳われている、子どもたちの興味・関心・意欲を引き出すこと、特に、幼稚園では表現活動を促

荒井康夫・伊藤充子・小林田鶴子(代)・佐地多美・渋谷寿・吉村智恵子
すための教師の技量が問われてきますので、その点についての検証も行う予定です。また、小学校教育を見据えた、子どもの発達段階に応じた指導の工夫についても調査したいと考えています。

研究のスケジュールは、現在実施している幼稚園（一部小学校を含む）のアンケート調査結果を元に、昨年と同様に聞き取り調査や保育参観を行い、10月には学会発表を行う予定です。その後、聞き取り調査を続けて実施し、採用試験対策も含めた、本学での実技指導のあり方を探っていきたいと考えています。

(文責：小林田鶴子)

平成23年度「開かれた地域貢献事業」

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」も6年目になります。今年度も、名古屋市の公共施設と展開している交流事業を、企画・運営していくことになりました。昨年度は大学ならではの講座になり、知的で個性が表現できる内容でよかったとの評価をいただきましたので、今年度も学内公募で本地域貢献事業への参画を先生方にお願ひし、充実した企画が採択されました。

まず、名古屋市瑞穂児童館との交流事業は、平成23年9月から24年2月までにほぼ1回のペースで、保育・教育、栄養・生活関係の6つの講座を開催します。さらに、12月の児童館クリスマスイベントとして6つの楽しい企画を行います。これらは文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部保育学科・生活

学科の教員と学生の有志、名古屋女子大学同窓会「春光会」および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。

次に、瑞穂保健所との交流事業は、平成23年9月から24年2月にかけて、65歳以上の高齢者を対象とした「若がり教室 キラキラコース(平成23年度認知症・うつ予防教室)」を支援する形で、6つの企画を行います。これらは文学部児童教育学科、家政学部食物栄養学科、短期大学部生活学科の教員と学生の有志、および総合科学研究所教職員が協力して実施いたします。

以上のように、名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所とで、より充実した地域貢献を推進・発展させてまいります。

(文責：原田 妙子)

講演会のお知らせ

演題 地震被害軽減に向けた取り組みと心構え

——最近の被害地震から学んだこと——

日時 9月16日(金) 10:30～12:00

場所 学校法人越原学園 越原記念館ホール

講師 釜江 克宏 氏 (京都大学原子炉実験所附属安全原子力システム研究センター・教授)

今回の東日本大震災が発生し、新聞等でも報道されている通り、本学がある東海地方においても東海・東南海・南海地震が切迫していると言われております。同じ被害を繰り返さないための地震への備えが早急に必要です。講演では、まず地震の正体や地震動、津波の生成メカニズムについてお話しいただき、阪神淡路大震災や今回の東日本大震災などから学んだこと、それらの研究成果を活用した地震動の予測研究の最先端や予測の実例についてご紹介いたします。

釜江 克宏 KAMAE Katsuhiko

略歴 昭和53年 名古屋工業大学大学院
工学研究科・建築学専攻修士課程修了
昭和58年 京都大学原子炉実験所・助手
平成10年 京都大学原子炉実験所・助教授
平成17年 同 附属安全原子力システム研究センター・教授

専門 地震工学
断層モデルを用いた地震動の予測手法の開発研究、その他

今年度運営委員

委員長 原田 妙子 HARADA Taeko (短期大学部)
石原 久代 ISHIHARA Hisayo (家政学部)
市原 千博 ICHIHARA Chihiro (短期大学部)
竹内 若子 TAKEUCHI Wakako (家政学部)
羽澄 直子 HAZUMI Naoko (文学部)

研究所メンバー

所長 竹尾 利夫 TAKEO Toshio
顧問 河村 瑞江 KAWAMURA Mizue
主任 渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi
講師 越原 もゆる KOSHIHARA Moyuru
職員 今峰 可南子 IMAMINE Kanako

編集後記

ここに総合科学研究所だより13号をお届けします。執筆にご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。この3月の大震災以降、様々な価値観の再検討が進んでいます。今回報告させていただいた研究成果や経過報告は、今後の新しい総合科学の価値観をつくりあげていく礎になりえる内容だと思われます。今後とも総合科学研究所だよりにご理解とご協力をお願いいたします。

文責：渋谷 寿